

3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価【2025】

	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）	教育課程編成方針（カリキュラム・ポリシー）	入学選抜方針（アドミッション・ポリシー）	単位認定基準	進級基準	卒業（修了）認定基準	学修成果の測定方法	学修成果	学修成果を見て教育内容・方法の充実・改善案	進捗状況	
美術学科	各分野（コース）における知識と技法、表現の特性を修得し、創造性を独自の表現手法を身に付け、芸術活動の出発点に立てるような技量を修得し、かつ卒業要件単位数12単位を修得し、卒業制作・論文の審査に合格した者に学士（芸術）の学位を授与する。 【画家】、「美術科教員」、「立体造形作家」、「イラストレーター」などを目指せる人材を育成する。	幅広い分野の表現に触れ、自分にあったジャンル、学びたいジャンルを発見できるように、1年次に油画、日本画、版画、彫刻を体験する。 2年次からは、選択したコースに分かれて専門性を身に付け、表現を深める。 4年次には、卒業作品の制作に取り組み、卒業制作展において展示発表を行う。	美術学科では、多彩な芸術表現に触れ、芸術家として確かな基礎を築き、自らのテーマ・表現方法により社会での活躍を目指す人物を求める。 【求める学生像】 ・美を探究し、創作、表現への好奇心と意欲や喜び、楽しみが感じられる人物 ・自発的な独自の個性がうかえる人物 ・社会への貢献、他者や地域の人々に芸術のこころを伝達する意欲がある人物 ・広い視野に満ち、異分野への好奇心、進取の気風に満ちた創造力を持つ人物	大学全体としての単位認定基準を定め、学生便覧に記載している。美術学科の4コースにおいて多少の相違はあるが、基本的には課題制作と自主制作の作品評価、学生の制作に取り組む姿勢、努力、狙い、工程、クオリティを総合的に見て評価し、A、B、C、D、Eの5段階の評定でC以上ならば単位取得と認定する。	美術学科の進級基準は、必要成果を満たす学生便覧に記載している。4年間の集大成としての卒業制作は、各コース毎に修得してきた技術、技法、表現力を駆使し、完成度や卒業後に制作活動の継続が可能なスキルや知識が獲得できているかを評価する。評価に関しては各コースの卒業制作にかかわる専任教員が制作の点数、ボリューム、形式等を学生に問わせ、全員で審査して決定する。	美術学科の必須科目、選択必須科目、卒業に必要な単位数は学生便覧に掲載している。4年間の集大成としての卒業制作は、各コース毎に修得してきた技術、技法、表現力を駆使し、完成度や卒業後に制作活動の継続が可能なスキルや知識が獲得できているかを評価する。評価に関しては各コースの卒業制作にかかわる専任教員が制作の点数、ボリューム、形式等を学生に問わせ、全員で審査して決定する。	学生の学修成果の測定は、各コース其々の専任教員による制作過程の前期の中間講評、後期の中間、最終講評で批評、伝達する。卒業制作において専門知識、技術、表現力、独創性、構成力等が獲得できているかどうかを評価する。就職状況の調査(教職、資格取得状況、その他)、各種コンクールでの受賞入選状況、個展やグループ展での受賞入選状況、卒業後の活動状況の把握。	卒業制作は各コースの担当教員全員が採点を行い協議の結果、学長賞、錦井賞、学修賞を選出、授与し卒業制作展、学外展示するとともに様々なメディアで紹介されている。また受賞以外の作品も卒業制作展で展示、公開している。卒業後も継続的に団体展、個展、グループ展、コンクール、公募展等で発表活動している。アートイベント等の企画や運営など、学修成果を土台として社会や地域に貢献、活動している。教員として活動している。また大学院修士課程、博士課程へ学位を得ようとする学生も多数いる。	産学連携の企画を継続、発展させていく。SMBC信託銀行の企画は、より多岐の出品学生が参加できるように展示店舗の拡大や店舗あたりの展示作品数増加を打診する。またオンラインアートミュージアムの作品解説を拡充、教員や作者による作品解説の実現を目指す。 ・キレーターや職人、油日彫版以外のジャンルの作家など、より幅広い人材を特別講師として招聘し、知見の拡大を目指す。 ・ITやSNSを利用した制作発表の学びの促進を図るとともに、インターネット、リテラシーやセキュリティ、個人情報保護に関する法律やルールに関する学びの機会を設ける。 ・停滞しているYouTubeを利用した技術・技法動画の公開やオンデマンド学習環境の整備は、個人情報保護や著作権防止の施策を整えながら進める。	SMBC信託銀行での作品展示では、これまでの内容を継続しつつ新たな企画として展示期間を満了した作品のうち数点を銀行に買い上げていただく制度の設立を目指している。買い上げていただいた作品は銀行の収蔵作品となり、三井住友銀行や企業に展示される予定である。これまでもレンタルとはいえず学生にとっては過分の賃借料をいただいていた。買い上げ制度の取組により学生たちの出品に対するモチベーションの更なる増加が期待される。また卒業生を含めた若い作家の活動に対する支援として、企業側にも大きな宣伝効果となることが期待できる。 ・特別講師として若い作家や海外での発表経験が豊富な作家、書道家など、より幅広い人選で特別授業を実施している。	
デザイン学科	命題に対して、よりよい結果を出すため、効果的かつ合理的な筋道を組み立てられる力を持ち、それを豊かな感性で個性で表現する力を身につける。かつ、卒業要件単位数12単位を修得し、卒業制作・論文の審査に合格した者に学士（芸術）の学位を授与する。 【グラフィックデザイナー】、「イラストレーター」、「アートディレクター」、「Webデザイナー」、「プロダクトデザイナー」、「プロフェッサー」などを目指せる人材を育成する。	1年次には、多様なデザイン表現の基礎を学ぶ。 2年次からは、グラフィックデザイン、イラストレーション、デジタルアート、デジタルメディア、空間デザイン、プロダクトデザイン、デザインプロデュースの専門分野に分かれ、社会の中でのそれぞれのデザインの役割を認識するとともに、社会の要求に応えられるプロフェッショナルとして活躍できる思考力や表現力を身につける。 そのための、発想や構想のアプローチを事例でシミュレーションしながら体験的に学び、そこに自身のオリジナル性ある表現力をも育てる。 4年次には、卒業作品の制作に取り組み、卒業制作展において展示発表を行う。	デザイン学科では、社会や生活とのかかわりに興味を持ち、「知りたい」「作りたい」「発信したい」などの意欲をもって工夫し、表現できる人物を求める。 【求める学生像】 ・デザイン表現やコンセプト構築に興味のある人物 ・自己の感性、創造力、表現力を伸ばしたい人物 ・主体的に知識、技術を修得する意欲のある人物 ・新たな課題解決に挑戦し続ける意欲・推進力のある人物	・大学全体として単位認定基準を定め、『学生便覧』に記載している。 ・授業出席はもとより、全ての課題作品の提出と授業目的の修得達成を基準としている。 ・1年次では、デザイン基礎及び2～3年次の共通授業については、各担当教員の連携によって公平性を保つ採点基準を設けている。 ・学科会議等で、新たな問題事項や推奨事項などの情報を共有して、認識の基準を保つようしている。 （エビデンス：『学生便覧』、「会議資料」等）	・各学年において適切な学修成果を得るため、進級のための基準を学年ごとに定め、『学生便覧』に掲載している。 ・1年次では、デザイン全体の基礎と、各コースの基礎体験をするスタートアップを設け、「基礎の修得」を基準としている。スタートラインを揃えるために基礎の前に希望者に「ウォーミングアップ」という予備授業も設けている。 ・2年次では、コース別の専門基礎体験に加えて、専門性への意欲と目的性の認識を求める。 ・3年次では、より高い技術の習得と、デザイン制作上の総合的判断を伴うディレクション能力を求める。 （エビデンス：『学生便覧』『新入生ガイダンス』等）	・4年次では、自分自身の独自性を育て、より具体的な専門領域への目的を持つことを求める。 ・卒業制作では、作品のクオリティは勿論、社会に対してデザインの見点での提案性があるか、またそれはオリジナルなものであるかを評価基準としている。 ・デザイン学科関連の専門科目については、「必須科目」「選択必須科目」ごとに卒業所要単位数を定め、『学生便覧』に掲載している。 （エビデンス：『学生便覧』『卒業制作展の手引き』等）	・卒業制作においては、各コースごとに中間発表及び最終発表を行いコース内全担当教員で審査を行っている。さらに優れた作品に対しては、学科全体の担当教員にて合同審査会を行うなどして、審査基準の公平性を保つようしている。 ・就職状況の調査 ・教職、図書館司書等の資格取得状況 ・卒業生の活動状況の把握 ・各種デザインコンペ等での受賞状況	・「卒業制作」の成果物はすべて、毎年2月に開催される「卒業制作展」で展示・公開し、また作品画集も刊行している。 ・各種デザインコンペティションにおいて、全関西またはインターナショナルの場で優秀な評価を得ている学生が多くなる。 ・3年次にやっている、コースを横断した産官学を取り組んで企業や社会からその成果を高く評価されている。 ・2年次を中心にやっているコースや学年を横断したプロジェクトで、社会に実践する企画や催事を学生等の手で実行され、関係各所から大きな評価と、学生が現場の実感を体験している。 ・毎年多くの学生が教員資格状や各種検定資格を取得している。	・卒業制作は各コースの担当教員全員が採点を行い協議の結果、学長賞、錦井賞、学修賞を選出、授与し卒業制作展、学外展示するとともに様々なメディアで紹介されている。また受賞以外の作品も卒業制作展で展示、公開している。卒業後も継続的に団体展、個展、グループ展、コンクール、公募展等で発表活動している。アートイベント等の企画や運営など、学修成果を土台として社会や地域に貢献、活動している。教員として活動している。また大学院修士課程、博士課程へ学位を得ようとする学生も多数いる。	・すでにやっている産官学授業等で、実社会とのコラボレーションをさらに充実させて、卒業後に向けての専門的体力作りをしていく。 ・学校から用意し与える環境を超えて、学生が自主的に向上心を持って研究や表現をしていくために、各種コンペや個人的研究など社会に真価を問う場へ積極的にチャレンジする機会を授業内に作っていく。 ・高い意識作りを推奨していくため、卒業で活躍している専門家をゲストに迎え、セミナーなどを充実させていく。	産学連携の「デザインプロジェクト」科において、デパートやショッピングセンター等での実際の販促活動での企画実行など、多くの企業との実体験を学んで、成果を得ている。自主企画運営を学ぶ「ハイパープロジェクト」科目で、学生が自主的に向上心を持って研究や表現をしていくために、各種コンペや個人的研究など社会に真価を問う場へ積極的にチャレンジする機会を授業内に作っていく。 ・高い意識作りを推奨していくため、卒業で活躍している専門家をゲストに迎え、セミナーなどを充実させていく。
建築学科	建築及び都市における社会的使命を理解し、人間生活を取り巻くあらゆる環境の諸問題の解決に向け、幅広い専門的知識や設計・ものづくりの技術、他学科とのコラボレーションから得られる識見、さらにそれらに応用する能力を身につけ、かつ卒業要件単位数12単位を修得し、卒業制作の審査に合格した者に学士（芸術）の学位を授与する。 主体的に活躍できる高度な専門職能人としての「空間デザイナー」、「ランドスケープアーキテクト」など、未来を拓く広義の「建築家」を育成する。	建築分野と環境デザイン分野を統合し、建物や都市をアートの視点から創造する設計能力を育む教育と研究を展開する。 自由な発想の芽を伸ばし、専門的知識と設計技術を徹底的に身につけられるように1年次からコンセプトから図面や模型へと空間を具現化していくプロセスを体験させ、2年次から3年次へと徐々に課題のレベルを上げ、建築・環境に関する知識の高度化と設計技術のスキルアップを図っていく。CADを含む製図はむろんのこと、構造力学や法規など一級建築士受験要件を充足する知識としっかり教育する。 4年次には、学びの集大成としての卒業作品の制作に取り組み、卒業制作展において作品を発表する。	建築学科では、総合芸術大学という環境を活かし、豊かな暮らしや新しい空間を提案できる芸術的豊かな建築家の育成を目指す。人間と環境を関係づける建物や都市のあり方に関心を持ち、広い意味での建築の萌芽を志す人物を求める。 【求める学生像】 ・建築・都市・それらの環境に好奇心を持つ人物 ・ものをつくるのが好きで、自由で豊かな発想と創造力を磨きたい人物 ・プレゼンテーション・コミュニケーション能力を伸ばしたい人物 ・建築、及び環境における自身の得意な分野を伸ばす意欲と熱意のある人物	・建築・環境の基礎的知識・技術に加え、デザインをより重視した設計能力を徹底的に鍛え、建築・環境デザインの分野で芸術的影響を与えることができる人材を育成するために、1年次から4年次まで実習・演習科目を中心とする教育を行っている。ここでは1つの科目を複数の教員が担当しているが、単位認定については、担当教員の評価と全員での評価を総合して実施している。 ・建築学科のカリキュラムは卒業時に建築士試験受験資格が得られるように構成している（公益財団法人建築技術教育普及センターの認定を受けている）。その認定に必要な科目群（建築設計製図、建築計画、建築環境工学、建築設備、構造力学、建築一般構造、建築材料、建築生産、建築法規など）については、資格試験で合格するための基礎学力が身につけられるように、客観的な試験を実施し、単位認定を行っている。	・創造的な設計に必要な知識やスキルを段階を追って修得するように、各学年に進級基準を設けている（「建築学科進級要件」として『学生便覧』に明記している）。1年次～2年次では基礎的な表現力を、2年次～3年次では、建築分野・環境デザイン分野にかかわる基礎から応用に至る設計能力（CADを含む）、3年次～4年次では卒業制作に取り組むことができる設計・研究能力を修得するのを進級基準としている。具体的な基準は以下の通りである。 ・1年次～2年次：①設計計画演習1、設計基礎実習1を修得済、②総計30単位以上を修得済のこと。 ・2年次～3年次：①建築CAD演習1、建築計画演習2または環境設計演習2、建築設計実習Ⅱまたは環境設計実習Ⅱを修得済、②総計60単位以上を修得済のこと。 ・3年次～4年次：①必須講義科目6科目（建築概論、環境概論、日本建築史、西洋建築史、建築構造力学Ⅰ、建築法規）の内、3科目12単位を修得済、②必須講義科目5科目（建築一般構造、材料学、環境工学、建築設備、施工）の内、3科目12単位を修得済、③選択必須科目の内、建築計画演習3または環境設計計画演習3、建築設計実習Ⅲまたは環境設計実習Ⅲを含む5科目16単位修得済、④総計90単位以上修得済のこと。	・建築学科開講の専門科目については、「必須科目」「選択必須科目」ごとに卒業所要単位数を定め、『学生便覧』に掲載している。その際、建築士試験指定科目との関係も明示している。 ・ディプロマ・ポリシーに記載した主体的に活躍できる高度な専門職能人としての空間デザイナー、ランドスケープアーキテクトなど、広い意味での「建築家」を育成するために、建築設計実習Ⅰと環境設計実習Ⅳの評価、及び卒業制作（設計または論文）の審査をゼミ指導教員が全員で合議の上で行っている。 ・卒業制作については、4年次ガイダンスを5回実施し、7月に「卒業制作テーマ＋実施計画書」、9月に「中間報告」、11月に「卒業制作の主旨」を提出させ、中間段階での評価を積み重ね、最終的に12月に展示・発表された卒業制作の評価を実施している。 ・就職状況、卒業生の活動状況、建築士資格の取得状況等の把握。	・設計基礎実習Ⅰ、建築設計実習Ⅱ～Ⅳ、環境設計実習Ⅱ～Ⅳでは、1年間に4課題程度が出題されるが、選ばれた優秀作品について講評会を実施している。 ・卒業制作では、すべての作品または論文を高度な専門職能人としての空間デザイナー、ランドスケープアーキテクトなど、広い意味での「建築家」を育成するために、建築設計実習Ⅰと環境設計実習Ⅳの評価、及び卒業制作（設計または論文）の審査をゼミ指導教員が全員で合議の上で行っている。 ・卒業制作については、4年次ガイダンスを5回実施し、7月に「卒業制作テーマ＋実施計画書」、9月に「中間報告」、11月に「卒業制作の主旨」を提出させ、中間段階での評価を積み重ね、最終的に12月に展示・発表された卒業制作の評価を実施している。 ・就職状況、卒業生の活動状況、建築士資格の取得状況等の把握。	・設計実習科目で作成した作品をポートフォリオにまとめさせ、学修成果を自ら確認し、他者に伝える機会を設けている。 ・設計実習科目の課題ごとに実施された講評会で選ばれた優秀作品を建築学科で刊行している『イヤーブック』に掲載している。これは学生に大きな励みとなる上でも、就職活動等で学修成果を示す上で有効に機能している。 ・卒業制作では、二次公開審査会を実施し、学長賞、学修賞、優秀賞、奨励賞、ゲスト審査員特別賞などを授賞している。その成果は「卒業制作展」、「卒業制作作品集」、「イヤーブック」で展示、公開している。 ・卒業制作については、日本建築学会、日本建築家協会、『近代建築』誌などで実施される展覧会やコンクールに出品し、しばしば優秀作品に選出されている。 ・卒業生の作品が建築雑誌に掲載されたり、賞を受賞したりすることを、学修成果を示すエビデンスとして確認している。	・建築及び都市における諸課題を解決する幅広い専門知識やスキルを身に付けさせるために、演習・実習科目を中心とした実践的教育を推進しており、その学修成果を確認する様々な仕組みを導入してきた。今後、他の分野・学科、大学院とのコラボレーションや社会の実課題への取組を含むProblem Based Learning (PBL) を組み込んだ対話的・協働的なデザイン能力を培う教育方法へと拡充する。 ・芸術学部の建築学科であることの特徴を活かして、「機能的で美しい建築」をデザインする能力や都市・環境の広がりの中で建築を構想する能力を修得させる教育方法の充実を図る。 ・年次報告書『イヤーブック』を入学実績のある高校を中心に送付するとともに、Web等を活用して学修成果広く社会に向けて発信する。 ・卒業生の就職・活動状況や建築士資格の取得状況等について、きちんとしたフォローアップ調査を行い、その結果を踏まえた学生のキャリア教育にも注力する。	・設計実習や卒業制作の作品を学外の展覧会に出品することを推奨し、各種の賞を受賞する機会が増えている（近畿学生住宅大賞、京都ランドスケープデザイン展、日本建築学会全国大学・高専卒業設計展示会及び建築学生全国卒業設計コンクール、日本建築家協会公益財団法人建築技術教育普及センター卒業設計優秀作品展（レン展）、日本造園学会関西支部研究・事例発表など）。『イヤーブック』については、オープンキャンパスや体験入学に参加した生徒に配布するとともに、指定校推薦リストに掲載される高校で、進学実績がある高校、工業高校等の建築科を有する高校に、『大学案内』の建築学科紹介ページと共に送付している。 ・卒業生の就職・活動・資格取得の状況を把握するために、名簿等の整備を進められている。特に『イヤーブック』に「建築学生RENDS」を設け、在学中や卒業生の活躍や受賞実績を記録し、広く社会に向けて発信している。	

3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価【2025】

	学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー)	教育課程編成方針 (カリキュラム・ポリシー)	入学選抜方針 (アドミッション・ポリシー)	単位認定基準	進級基準	卒業 (修了) 認定基準	学修成果の測定方法	学修成果	学修成果を見て教育内容・方法の充実・改善	進捗状況
文芸学科	<p>文芸やノンフィクション、出版、翻訳などの各分野で通用するスペシャリストとして、専門知識や実践力を身につけ、かつ卒業要件単位数124単位を修得し、卒業論文・制作の審査に合格した者に学士 (芸術) の学位を授与する。</p> <p>「小説家」、「国語科教員」などを旨とする人材、「出版業」、「マスコミ」などで活躍できる人材を育成する。</p>	<p>1年次では、文章表現や文芸、メディア論の基礎の学修からスタートし、日本および世界各地の文芸を幅広く身につけ、一方で制作の準備にもかかる。</p> <p>2年次では、文章能力を高めることを追求しながら、引き続き文学や演劇の様式・歴史を学修し、一方で広告や印刷の基礎を学ぶ。</p> <p>3年次より、ゼミ形式を取り入れ創作 (小説・詩・脚本)、ノンフィクション・文芸批評、出版、編集、翻訳・講読の分野に分かれ専門知識を修得していく。</p> <p>4年次には、卒業論文の制作に取り組む。</p>	<p>文芸学科では、小説、詩、脚本、研究、文芸批評、出版、翻訳など多彩な分野で活躍する教員の指導のもと、言葉のセンスを鍛え、読みの深さ、豊かな書く力を育成する。日本語表現の魅力、豊かさに目覚める人物を求める。</p> <p>【求める学生像】</p> <p>本を読むことで、感動することのできる人物</p> <p>文章を書き、思索することによって心をつかすことができる人物</p> <p>自身が書いた文章や物語を他者に伝えることに喜びを感じられる人物</p> <p>豊かな文章表現力と多角的な読解力を身につけたい人物</p>	<p>・大学全体として単位認定基準を定め、「学生便覧」に掲載している。</p> <p>・文芸学科の必修科目等については、定期的に学科会議等で協議を行い、単位認定基準 (評価の観点・尺度等) について合意形成を図っている。</p> <p>・とりわけ、初年次教育の要となる必修科目「文章表現の基礎」や最終年次の必修科目「文芸演習Ⅰ」などは10名程度の少人数クラスの履修回数のかたがとを定めているため、クラス間で成績評価基準に格差や不公平が生じないように配慮している。</p> <p>(エビデンス: 『学生便覧』、学科の申し合わせ事項をまとめたもの、会議資料等)</p>	<p>・各学年において適切な学修成果を得るため、進級のための基準を学年ごとに定め、「卒業論文・制作」について『学生便覧』に掲載している。</p> <p>・1年次→2年次: 2年次以降の専門的学修の基礎となる文芸に関する入門的な知識 (文学史やメディア論等) や実践的スキル (小説創作の基礎等) を身につける。</p> <p>・2年次→3年次: 3年次から本格的に始まる個人的な創作や研究に先立ち、幅広く文芸の諸分野 (小説・詩・脚本・演劇・出版・編集等) についての専門的な知識や実践的スキルが十分に修得できているか。</p> <p>・3年次→4年次: 4年次での「卒業論文・制作」に取り組むために必要な専門的知識や実践的スキルが十分に修得できているか。</p> <p>(エビデンス: 『学生便覧』等)</p>	<p>・文芸学科開講の専門科目については、「必須科目」に「選択必須科目」ごとに卒業所要単位数を定め、「卒業論文・制作」 (小説・研究等) について、各分野でスペシャリストとして活躍するための専門知識や実践力が身につけているかどうかを評価。</p> <p>・就職状況の調査</p> <p>・教職、図書館司書等の資格取得状況</p> <p>・卒業生の活動状況の把握</p> <p>・各種コンクール等での受賞状況</p> <p>(エビデンス: 『学生便覧』『卒業論文・制作の手引き』等)</p>	<p>・「卒業論文・制作の年引き」に従って提出された「卒業論文・制作」 (小説・脚本・研究等) について、各分野でスペシャリストとして活躍するための専門知識や実践力が身につけているかどうかを評価。</p> <p>・就職状況の調査</p> <p>・教職、図書館司書等の資格取得状況</p> <p>・卒業生の活動状況の把握</p> <p>・各種コンクール等での受賞状況</p> <p>(エビデンス: 『学生便覧』『卒業論文・制作の手引き』等)</p>	<p>・「卒業論文・制作」については、各ゼミの担当教員が優秀作品を選出し、それらの作品を、卒業生のすべての専任教員およびゼミ担当者が読み、「グランプリ審査」を行っている。そこでの議論を通じて、卒業時において学生が身につけるべき学修成果について学部の教員間で合意形成が図られている。</p> <p>また、受賞作品を活用して公表することを通じて、学生や社会に対して文芸学科における学修の到達目標を明示している。「卒業論文・制作」の成果物はすべて、毎年2月に開催される「卒業制作展」で展示・公開している。</p> <p>一定数の学生は文芸学科での学修成果を土台として出版、マスコミ関連の企業に就職している。内訳は新聞社 (2022年度2名、2023年度3名、2024年度1名、2024年度1名)、印刷会社 (2022年度1名、2023年度1名、2024年度2名) 等である。</p> <p>・中学校教職、司書等として就職する者もいる。内訳は中学校教職 (2022年度1名、2023年度1名、2024年度2名) 中学校講師 (2022年度2名、2023年度1名)、司書 (2022年度1名、2023年度3名、2024年度2名) 等である。</p> <p>・資格取得者数は以下の通りである。教職 (中学/国語): 2022年度7名、2023年度7名、2024年度4名 図書館司書: 2022年度17名、2023年度16名、2024年度12名 芸芸員: 2022年度2名、2023年度4名、2024年度名</p> <p>・卒業後もなく小説家デビューをはたした学生もいる。</p>	<p>「社会への発信」</p> <p>・「卒業論文・制作」の優秀作品をまとめた機関誌『文藝』をリニューアルして発行し、社会への訴求力を強化するほか、授業内成果物を社会に向けて発信するための出版物 (書籍、雑誌) を積極的に発行している。</p> <p>・「キャリア教育の充実」</p> <p>・2023年度前期には「文芸特講Ⅰ」において三浦しをん氏を招いての特別講義を行ったが、今後、さまざまなジャンルの作家、編集者等を招いての取り組みをさらに増やしていく。</p> <p>・2022年度より、文芸学科生との就活をサポートするための講座・セミナーを開催している。</p> <p>年間5〜6回開催、学科独自に授業外で開催してきた。その結果、文芸学科の学生のキャリア形成への意識と意欲が高まり、就職内定率も大きく改善した。2024年度には、新カリキュラムの学生が3年次に進級し、新たに設定された「文芸特講Ⅲ、Ⅳ」において集中的にキャリアデザインに関する学びを深める計画がある。</p> <p>・教員資格免許等については取得する学生が増加傾向にある。今後ほきつづき、入学当初からガイダンスを丁寧に行い、資格取得のサポートを進めていく。</p> <p>・年間十数回開催される学科会議では、学生の進路決定状況等を専任教員全員で確認し、情報の共有と意識向上を図っている。</p> <p>・以上のような取り組みによって、学科での学びを活かせる職場への就職などに關して大きな成果を収めている。</p> <p>(3つのポリシーとカリキュラムの改訂) 2022年度入学生から実施してきた現在のカリキュラムでの教育実績を踏まえて、次年度から3つのカリキュラムを改訂する。あわせてカリキュラム全体を見直し、2027年度入学生より新カリキュラムを実施する。(2025.12.21)</p>	
放送学科	<p>テレビ、ラジオといった放送メディアを中心に、インターネット、新聞、雑誌などますます多様化する他のメディアをクロスさせながら未来のコミュニケーションを学ぶ。例えばどんな時代が進化しても「メディアの中心は放送にある」という自信と誇りを高め、技術力、論理力とともに協調性を高め、またリーダーシップを身につけ、かつ卒業要件単位数124単位を修得し、卒業論文・制作の審査に合格した者に学士 (芸術) の学位を授与する。</p> <p>「クリエイティブディレクター」、「番組制作スタッフ」、「映像カメラマン」、「アナウンサー」、「声優」、「ナレーター」などを旨とする人材を育成する。</p>	<p>1年次では、「良きジャーナリストである前に良き人間であれ」という理念に基づいて、基本的な教育が行われる。放送学の基礎科目の修得からスタジオや機材の取り扱い、カメラ、音声、編集の実習、中継車に乗り込んでの熱血取材などを行う。</p> <p>2年次になると、制作、先端メディアコミュニケーション、アナウンス、声優という、各コースに分かれ、更に専門性を高めていく。「これだけは誰にも負けない」というプロフェッショナルへの道へ進んでいく。</p> <p>4年次には、卒業制作・論文に取り組む。</p>	<p>放送学科では、放送ジャーナリズムを基本に、進化するマスメディア社会における知識と技術を最新機器・設備と多彩な指導者の中で学ぶ。「創る喜び」「伝える感動」を身に付けグローバル時代に活躍し、人々と協力し取り組んでいく意欲ある人物を求める。</p> <p>【求める学生像】</p> <p>旺盛な好奇心と、あくなき探究心を備えている人物</p> <p>マスメディアを駆使して広く社会に伝えることに関心がある人物</p> <p>社会の変化に適応できる柔軟性と可能性に挑戦する力を有している人物</p> <p>声の力・とばす力・映像の力の表現者、技術者になりたいと意欲を持つ人物</p> <p>(エビデンス: 「学生便覧」等)</p>	<p>・大学全体として単位認定基準を定め、「学生便覧」に掲載している。</p> <p>・講義系科目では、授業感想文や質問、小テストなどを通して、積極的に関心を持って臨んでいるかを重要な単位認定の基準としている。</p> <p>・実習、演習系科目では、個人の表現力や技術力の修得のため、本学科では不声の表現技術が十分に修得できている。重要な基準としている。</p> <p>・最終年次の「卒業、卒制」 (声優コースは「卒業公演」) 入次以降省略) は、本学科の集大成とも言える重要な科目であるため、各担当教員は特段の注意を払って指導し、作品の審査は一部合議制にするなど慎重に行っている。</p> <p>(エビデンス: 「学生便覧」等)</p>	<p>・各学年において適切な学修成果を得るため、進級のための基準を学年ごとに定め、「放送学科進級要件」として『学生便覧』に掲載している。</p> <p>・1年次→2年次: 2年次以降4つのコースに分かれて学習するための基礎となる、各領域の概要の理解に加え、撮影・録音等放送機材の操作や文章・音声の表現技術が十分に修得できているか。</p> <p>・2年次→3年次: それぞれのコースで、本格的に求められる企画力や考察力、表現技術を身につけるために必要な科目であるため、講義や実習等が修得できているかどうか。</p> <p>・3年次→4年次: ゼミや実習を通じて、「卒業論文・卒業制作」 (声優コースは「卒業公演」) に取り組むために必要な専門的知識や実践的スキルが十分に修得できているか。</p> <p>(エビデンス: 「学生便覧」等)</p>	<p>・放送学科の専門科目については、「必須科目」に「選択必須科目」等ごとに卒業所要単位数を定め、「学生便覧」に掲載している。</p> <p>・先端メディアコミュニケーションコース (2022年度新設、田広浩コース): 「必須科目」の所要単位数を増やし、新しいメディアに応じたCM作りや動画表現力の習熟度を基準とする。</p> <p>・制作コース: テレビ、ラジオ番組の企画から技術までを習得する制作実習に重きを置き、作品作りを通じてオリジナルディレクションやゲームワーク力の習熟度を基準とする。</p> <p>・アナウンスコース: アナウンス実習や「声と言語」等の必須科目を通して、メディアの世界で通用するアナウンス力と、人としてのコミュニケーション力の習熟度を基準とする。</p> <p>・声優コース: 発声法や演技法等の技術面はもとより、声優として役者として求められる幅広い表現力の習熟度を認定基準とする。</p> <p>(エビデンス: 「学生便覧」等)</p>	<p>・「卒業論文・制作」については、各ゼミの担当教員が優秀作品を選出し、それらの作品を、放送学科のすべての専任教員およびゼミ担当者が読み、視聴して「グランプリ審査」を行っている。そこでの議論を通じて、卒業時において学生が身につけるべき学修成果について学部の教員間で合意形成が図られている。</p> <p>・学生達が「卒業論文・制作」において、その企画力や技術力、表現力等が如何に発揮でき、且つ担当教員がより公平に評価できるようにするため、「卒業論文・制作」の成果物はすべて、毎年2月に開催される「卒業制作展」で展示・公開している。</p> <p>・放送学科生との就職先は、①放送局や番組制作会社などの放送関連企業、②広告会社や制作プロダクションなどの広告関連企業、③声優事務所、④一般企業、ほか。</p> <p>・受賞作多数</p> <p>(エビデンス: 「卒業制作作品規定 (2022年度)」等)</p>	<p>・「卒業論文・制作」のグランプリ等受賞作品を活用して公表し、学内外に対して学生や放送学科の学修成果を明示している。</p> <p>・「卒業論文・制作」の成果物はすべて、毎年2月に開催される「卒業制作展」で展示・公開している。</p> <p>・放送学科生との就職先は、①放送局や番組制作会社などの放送関連企業、②広告会社や制作プロダクションなどの広告関連企業、③声優事務所、④一般企業、ほか。</p> <p>・資格取得者数は以下の通りである。教職 (中学/国語): 2022年度7名、2023年度7名、2024年度4名 図書館司書: 2022年度17名、2023年度16名、2024年度12名 芸芸員: 2022年度2名、2023年度4名、2024年度名</p> <p>・卒業後もなく小説家デビューをはたした学生もいる。</p>	<p>「社会への発信」</p> <p>・「卒業論文・制作」の優秀作品をまとめた機関誌『文藝』をリニューアルして発行し、社会への訴求力を強化するほか、授業内成果物を社会に向けて発信するための出版物 (書籍、雑誌) を積極的に発行している。</p> <p>・「キャリア教育の充実」</p> <p>・2023年度前期には「文芸特講Ⅰ」において三浦しをん氏を招いての特別講義を行ったが、今後、さまざまなジャンルの作家、編集者等を招いての取り組みをさらに増やしていく。</p> <p>・2022年度より、文芸学科生との就活をサポートするための講座・セミナーを開催している。</p> <p>年間5〜6回開催、学科独自に授業外で開催してきた。その結果、文芸学科の学生のキャリア形成への意識と意欲が高まり、就職内定率も大きく改善した。2024年度には、新カリキュラムの学生が3年次に進級し、新たに設定された「文芸特講Ⅲ、Ⅳ」において集中的にキャリアデザインに関する学びを深める計画がある。</p> <p>・教員資格免許等については取得する学生が増加傾向にある。今後ほきつづき、入学当初からガイダンスを丁寧に行い、資格取得のサポートを進めていく。</p> <p>・年間十数回開催される学科会議では、学生の進路決定状況等を専任教員全員で確認し、情報の共有と意識向上を図っている。</p> <p>・以上のような取り組みによって、学科での学びを活かせる職場への就職などに關して大きな成果を収めている。</p> <p>(3つのポリシーとカリキュラムの改訂) 2022年度入学生から実施してきた現在のカリキュラムでの教育実績を踏まえて、次年度から3つのカリキュラムを改訂する。あわせてカリキュラム全体を見直し、2027年度入学生より新カリキュラムを実施する。(2025.12.21)</p>	
写真学科	<p>多様な写真表現に対応できる基本的な技術と知識を身につけ、かつ卒業要件単位数124単位を修得し、卒業制作・論文の審査に合格した者に学士 (芸術) の学位を授与する。</p> <p>「写真家」、「広告写真家」、「報道写真家」、「ブライダルフォトグラファー」、「レタチャー」など、マスコミ分野、ポートレート分野、デジタルメディア企業における写真のエキスパートを目指す人材を育成する。</p>	<p>1年次では、写真の基礎や歴史を学び、2年次では写真の理論や銀塩 (暗室) 授業、デジタル写真と製本授業、動画やドローン操縦技能を修得する授業等、広域な分野から写真を学ぶ。3年次からは各自の専門性を確かなゼミを選択し、更に専門性を高めていく。</p> <p>4年次には、主に卒業制作に取り組み、学内外において卒業制作展を行う。</p>	<p>写真学科では、芸術や情報メディアと、幅広い可能性を持つ写真の領域を理解し、エキスパートとしての将来を意識して専門性を培うことのできる人物を求める。</p> <p>【求める学生像】</p> <p>卒業後の進路に明確な志望を持ち、それに向けて努力できる人物</p> <p>写真に関わる知識や技術、表現方法などに強い探究心を持つ人物</p> <p>オリジナルディレクションやゲームワーク力の習熟度を基準とする。</p> <p>・写真実習・写真制作等、複数の教員によって指導にあたる科目においては、教員間で成績評価基準に格差や不公平が生じないように配慮している。</p> <p>(エビデンス: 『学生便覧』等)</p>	<p>・大学全体として単位認定基準を定め、「学生便覧」に掲載している。</p> <p>・講義系科目では、授業感想文や質問、課題などを通して、積極的に関心を持って臨んでいるかを単位認定の基準としている。</p> <p>・実習、演習系科目では、課題のテーマに沿っているかどうか、講義系科目での知識、技術が発揮されているかどうか、といった単位認定基準の協議を定期的に学科会議、学年別会議で行っている。</p> <p>・写真実習・写真制作等、複数の教員によって指導にあたる科目においては、教員間で成績評価基準に格差や不公平が生じないように配慮している。</p> <p>(エビデンス: 『学生便覧』等)</p>	<p>・各学年において適切な学修成果を得るため、進級のための基準を学年ごとに定め、「写真学科進級要件」として『学生便覧』に掲載している。</p> <p>・1年次→2年次: 2年次以降の専門的学修の基礎となる撮影やスタジオ機材の操作や、写真・文章の表現技術が十分に習得できているか。</p> <p>・2年次→3年次: 3年時から本格的に求められる企画力や表現等の考察力・表現力を養うために、必要となる専門的知識や実践的スキルが習得できているか。</p> <p>・3年次→4年次: 4年次での「卒業論文・制作」に取り組むために必要な専門的知識や実践的スキルが十分に習得できているか。</p> <p>(エビデンス: 『学生便覧』等)</p>	<p>・「卒業論文・制作の手引き」に従って提出された「卒業論文・制作」については、写真学科の専任教員・ゼミ担当者により審査を行っている。そこでの議論を通じて、卒業時において学生が身につけるべき学修成果について学部の教員間で合意形成が図られる。これに伴い学長賞等各賞が選出され、卒業時に表彰される。</p> <p>(エビデンス: 『学生便覧』等)</p>	<p>・「卒業制作」については成果物は全て、毎年2月に開催される「卒業制作展」で展示・公開している。また、「学長賞」「学科研賞」等の受賞作品は毎年学外の一般ギャラリーにおいて展示し、学生や社会に対して、写真学科の学修成果における優秀作品として公開している。</p> <p>一定の学生は写真学科での学修成果をもって新聞社や出版関連の企業、写真スタジオや広告代理店などの企業に就職している。</p> <p>・卒業後もなく写真家としての活動し、国内外で活躍している者もいる。</p>	<p>デジタル技術の大躍進により大きく変化し続けている写真の世界であるが、時代に取り残れない為に最新の情報を取り入れながら、次世代に活躍できる人材を育てること。</p> <p>その為に、メーカーやメディアとの連携をしながら、充実した教育とスキルを身につけさせる。</p> <p>また、デジタル化の波に乗るばかりではなく、写真の基礎となった古典技法を含む暗室作業にも重点を置く授業を進めている。</p> <p>指導が多岐に渡り広く薄く多様な態度の為、より深く学びたい学生向けワークショップを開くなど企画に努めている。産学共同を推進している。企業等との連携を掛け、より実践的な内容で修学できるようにしている。</p> <p>また、新しいものを手掛けた、それらによる成果物が仕上がるような指導を模索している。</p>		

3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価【2025】

	学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー)	教育課程編成方針 (カリキュラム・ポリシー)	入学選抜方針 (アドミッション・ポリシー)	単位認定基準	進級基準	卒業 (修了) 認定基準	学修成果の測定方法	学修成果	学修成果を見て教育内容・方法の充実・改善案	進捗状況
工芸学科	自分の手と頭を使い、ものを創造する力と現代のコンピュータ社会に対応した学習能力を身につけた人材を育てることを目標とし、かつ卒業要件単位数124単位を修得し、卒業制作の審査に合格した者に学士 (芸術) の学位を授与する。 工芸学科では、工芸作家や職人の育成とともに企業への就職も目指している。制作のみならずプレゼンテーションのスキルを修得するためIT分野の学習や話し方学習・作品撮影など企業コースに対応した人材を育成する。	1 年次は金属工芸、陶芸、ガラス工芸、テキスタイル・染織の4コースで異なる素材や基本的技法に触れて、手仕事の大切さを学ぶ。それと同時に新たな工芸教育の一環としてデジタル学修にも積極的に取り組む。 2 年次からは、自ら希望する専門のコースに進み、それぞれの素材の表現方法を追求する。 それに加えて2～4年次では就職や進学を準備としてポートフォリオ作成・プレゼンテーション演習・アートマネジメント演習など実社会に向けてIT機器を駆使したスキルを授業内で修得する。 4 年次には、これまでの学びの集大成として卒業制作に取り組み、卒業制作展において成果を発表する。	工芸学科では、伝統技法や技術を積極的に取り入れて、時代に適した新しい「ものづくり」の体験を活かし、実際の「ものづくり」の体験を活かし、デザイン・企画などのクリエイティブな職業を通して社会での活躍を目指す人物を求める。  【求める学生像】 ・自身の個性や感性を発見したい人物 ・ものを作ろうとする強い思いや意志を持った人物 ・「ものづくり」の体験を活かし、クリエイティブな仕事に関わりたい人物 ・「美しさ」にこだわりを持ち、社会で生きていく人物	・大学全体として単位認定基準を定め、『学生便覧』に掲載している。 ・1年次の授業の要となる必修科目「工芸基礎実習Ⅰ」は全員が4コースを、「工芸基礎実習Ⅱ」は選択した2コースを受講するカリキュラムとなっているため、学年末に成績会議を設け、担当教員の同意のもと単位の認定を行う。 ・2年、3年、4年次の必須科目については、各年次における到達目標を精査したうえ、作品提出、レポート等により評価を行い、担当教員全員で審議、同意のもと単位の認定を行う。 (エビデンス：『学生便覧』、会議資料等)	・各学年において適切な学修成果を得るため、進級のための基準を学年ごとに定め、『工芸学科進級要件』として『学生便覧』に掲載。 ・1年次～2年次：2年次以降各自が選択したコースで専門的な学修を進めるための基本的技法や手仕事の大切さ、及びデジタルスキルを修得できているか。 ・2年次～3年次：各コースで扱う素材の表現方法や基礎的知識を修得できているか。 ・3年次～4年次：「卒業制作」論文に向けた専門的技術や知識が修得できているか。 (エビデンス：『学生便覧』等)	・工芸学科開講の専門教育科目については、「必須科目」「選択必須科目」ごとに卒業所要単位数を定め、『学生便覧』に掲載。 ・「卒業制作」論文については、作品の表現、完成度、独自性、証書授与式のもと各コースにおいて表彰、副賞の授与を行う。 ・各コース就職担当委員による就職状況の調査 ・教職、学芸員等の資格取得状況 ・作品コンクール等での受賞状況の把握 ・授業アンケート等での受講状況の把握 ・卒業生の活動状況の把握 ・離職者状況の把握 ・就職状況の把握 (エビデンス：『学生便覧』等)	・「卒業制作」論文については、各コースで優秀作品を選出し専任教員8名・キュレーター等の専門職、一般企業、工芸関係工房、教育機関に就職。 ・研究実習は各コースで選出し、卒業証書授与式のもと各コースにおいて表彰、副賞の授与を行う。 ・各コース就職担当委員による就職状況の調査 ・教職、学芸員等の資格取得状況 ・作品コンクール等での受賞状況の把握 ・授業アンケート等での受講状況の把握 ・卒業生の活動状況の把握 ・離職者状況の把握 ・就職状況の把握 (エビデンス：『学生便覧』等)	・一定数の学生は工芸学科での学修成果を土台にプロダクトデザイナー・キュレーター等の専門職、一般企業、工芸関係工房、教育機関に就職。 ・少数ではあるが工芸作家活動をスタートした卒業生もいる。 ・毎年数名程度の学生が教員免許状を取得。 ・3、4年生については就職活動状況を各コース就職担当教員が把握し、状況に応じ学生へのアドバイスを行う。 ・各コース教員が高学年実習授業で、各種作品コンクールへの応募を推奨し、複数の人賞・入選者を輩出している。 ・大学として授業アンケート等を実施。 ・「卒業制作」の成果は毎年度末に学内で開催の卒業制作展にて展示・公開している。	工芸作品を発表する場は美術館やギャラリー等、作品を鑑賞するための場だけではなく、4年間の集大成である卒業イヤや生活空間の日用品など多岐にわたる。大学4年間の集大成である「卒業制作」では作品の制作のみで終わるのではなく、既存の建築のプロトタイプを展示会場として、建築空間の中に自周囲へ作品を置くのではなく、その作品を展示、発表する環境にも目を向ける指導が必要だと考える。新カリキュラムであるプレゼンテーション演習、インスタレーション演習、アーツマネジメント演習などで学び、工芸作品を社会にどのように提示するかを考察する機会を、複数の人賞・入選者を輩出している。 また、あべのハルカス近鉄本店において「工芸のちから2025 卒業生」在学生/教員・技術指導員・副手による展示販売会 (2025年5月28日から6月2日)を開催した。今回は「大阪・関西万博」の開催で会場の面積も広くなり、これまでの卒業生に加え在学生、教員、研究室スタッフも参加し、多くの来場者、購入者を得ることができ、工芸作家や職人の育成の一助になったと考えている。 新カリキュラム科目の履修を促すためには、年度の始まりに対象学生を集めた授業ガイダンスを行なっている。	
映像学科	人間の知性と技術の総合芸術である映画映像の教育を通して、映画映像分野の教養や手技を後継者に伝承することはもちろんのこと、広く社会一般に貢献する人材を育てることを目標とし、かつ卒業要件単位数124単位を修得し、卒業制作の審査に合格した者に学士 (芸術) の学位を授与する。 「映画監督」、「撮影監督」、「脚本家」、「映像クリエイター」、「アニメーション作家」、「プロデューサー」などを目標とする人材を育成する。また、「芸術」、「娯楽」、「サービス業」だけでなく、「商業」、「製造業」、「経済」、「政治」、「海外交流」などの分野でも、インテリジェンスとイマジネーション、コミュニケーション能力を持って、リーダーシップを発揮できる人材を育成する。	芸術の中でも映画映像はより大衆に近いものである。その120年を超える歴史は、時代を越え、国を越え、人々の心を魅了してきた。本学科では「見る、学ぶ、作る」の三つを柱としている。映画を見ることで、優れた映画人たちのメッセージから知性と教養を深め、学ぶことで、社会的、文化的な映画映像の力を知り、作ることで、創造性と想像力、表現性と伝達力、協調性と指導力を持つ人間を形成する教育の編成となっている。 4 年次には、卒業論文、卒業シナリオ、卒業作品制作に取り組み、卒業制作展にて作品上映を行う。	映像学科では、企画、監督、脚本、撮影、照明、美術、録音、編集など制作のプロセスを実践的に学び、さらなる創意と教養を深めていくことを目指している。映画・映像の制作に関心があり、その専門的な技術、知識を修得したいという意欲を持つ人物を求める。  【求める学生像】 ・映画芸術、映画産業に関心があり、映画の得業を担っていききたいという意欲を持つ人物 ・映画に携わる技術、感性を身につけていきたいという人物 ・映画という知性と技術の創造物から知識や教養を学びたい人物 ・映画を通して得たものを一般社会に広げたいという意欲を持つ人物	大学全体として単位認定基準を定め、『学生便覧』に記載している。定期的な学修評価等で協議を行い、単位認定基準 (評価の観点、尺度等) について合意形成を図っている。 映像制作、シナリオ等、複数の教員が指導にあたる科目が多いことが映像学科の特色であるが、その場合、教員の間で成績評価基準に格差や不公平が生じないよう主眼を入らないう格別の注意を払っている。 (エビデンス：『学生便覧』、学科の会議資料等)	各学年において適切な学修成果を得るため、進級のための基準を学年ごとに定め、『映像学科進級要件』として『学生便覧』に掲載している。 1年次～2年次：初年次教育の要である「基礎」映画制作法 (シナリオ制作) については主体的な授業参加が出来ない者については年次への進級を不可としている。 2年次～3年次：本学で他大学に全過程の修得「制作Ⅰ」は、学生全員が受講することを原則として、いかなる理由でも集団作業における役割を責任感をもって果たせない者は3年次の進級を不可としている。 3年次～4年次：4年次での「卒業論制作」に取り組むために必要な専門的知識や実践的スキルが十分に修得できているかを見る。 (エビデンス：『学生便覧』等)	映像学科開講の専門科目については、「必須科目」「選択必須科目」ごとに卒業所要単位数を定め、『学生便覧』に掲載している。 「卒業制作」は映像による提出物のみではない、論文、企画、シナリオなど文書、書類によるものも認められており、それら提出物の分量 (上映時間) 等についてはその分野ごとに各教員から学生へ周知を徹底している。 (エビデンス：『学生便覧』等)	各学年の実習での成果物、および卒業制作作品においてクリエイティブを厳正に評価し、技術力、芸術性、協調性、発信力などが身につけているかを重視した採点をを行う。 「卒業制作」については、担当教員が「学長賞」「学費賞」「コダック賞」「イマジカ賞」「研究室賞」他優秀作品を選出し、それらは映像学科全ての教員によるディスカッションで決定され、映像学科作品のあるべき方向が論じられる。 ・就職状況の調査 ・卒業生の活動状況の把握 (監督、撮影、監督、脚本家等)	各学年の実習、および卒業制作において映像制作における技術 (インテリジェンス) を厳正に評価し、最新の映像制作工程や体感的にも学生たちに多く関わってもらうと、一年次からクリエーターとしての創造性を醸成するための作品制作を行い、それらを発表する「ファーストクリエイションショー」を開催。これらの取り組みを通して、創る者と同時に発表することの重要性を専門コース編成においては、年度の進行や内容について見直し、一部のコースの併合を行った。		
舞台芸術学科	舞台上演を前提にした実践的なカリキュラムの中で、現場で役立つスキルを身につけるとともに、対話力、協調性、礼儀作法など、舞台人にとって欠かせない資質を身につけ、かつ卒業要件単位数124単位を修得し、卒業制作の審査に合格した者に学士 (芸術) の学位を授与する。 想像力と詩的感性をあわせ持った「俳優」、「ダンサー」、「チームワークパフォーマー」、「舞台制作スタッフ (美術、音響、照明)」などを目標とする人材を育成する。	1 年次より、演技演出、ミュージカル、舞踊、ポピュラーダンス、舞台美術、舞台音響効果、舞台照明の各コースに分かれ、専門的なアプローチを通して、創造活動の基本となる感性、知性を養い、身体感覚を高める。また、コースを越えた舞台上演にむけた共同作業で、互いに切磋琢磨する中、より豊かな人間関係を構築する力を育むことができる。 4 年次には、卒業制作として舞台公演にて成果を発表する。	舞台芸術学科では、舞台は演者と裏方の共同作業によって成り立っていることを理解すると共に、自身が取り組む分野について厳格な技術の研鑽に励む人物を求める。  【求める学生像】 ・さまざまな分野の演者として表現力を磨きたりたい人物 ・舞台の裏方として専門的な技能を身につけたりたい人物 ・「舞台人」としての自覚や物事に対する姿勢、考え方を学びたい人物 ・広く社会で求められる礼儀作法や協調性、豊かな人間性を育みたい人物	・大学全体として単位認定基準を定め、『学生便覧』に記載している。 ・舞台芸術学科の必修科目等については、各年次における到達目標を精査したうえで基準を設け、個人々の成果を客観的に評価できるよう連携し、合意形成を図っている。 ・その際に、合同舞台演習といった、実践的な授業においては、何名かの教員が主体的に行われている。 ・その際に、合同舞台演習といった、実践的な授業においては、何名かの教員が主体的に行われている。 ・その際に、合同舞台演習といった、実践的な授業においては、何名かの教員が主体的に行われている。 (エビデンス：『学生便覧』、『シラバス』等)	・各学年において適切な学修成果を得るため、進級のための基準を学年ごとに定め、『舞台芸術学科進級要件』として『学生便覧』に掲載している。 ・1年次～2年次：舞台芸術に携わるための基礎的な知識や理論、そして各コース其々の実践にあたっての基礎力が修得できているか。協働作業か、取り組みが主体的に行われているか。 ・2年次～3年次：各コース固有の専門能力が修得できているか。同時に、協調性、想像力、創造力といったコースを超えた舞台芸術学科共通の専門能力が、修得されているかどうか。 ・3年次～4年次：合同舞台演習といった公演制作の授業において、「卒業制作」に取り組むために必要な、前年次の学びの上に修得されているかどうか。 (エビデンス：『学生便覧』、『シラバス』等)	・舞台芸術学科の専門科目については、「必須科目」「選択必須科目」等ごとに卒業所要単位数を定め、『学生便覧』に掲載している。 ・「卒業論文・制作」については、年度当初からコースごとに内容、達成目標について学生への周知をはかっている。 ・各自が選択した「卒業制作」の形態 (公演、制作、戯曲制作、論文など) を通じて専門能力がいかに発揮されたか。 (エビデンス：『学生便覧』、『シラバス』等)	・「卒業制作」については、卒業制作の学科審査により各賞が設けられており、担当教員の推薦のもとに、コースを超えた審査委員会により、各賞を選定。 ・「観客」を前提とする舞台芸術の評価のされ方を全体に提示するとともに、担当教員は、各学生個々に向き合い、その個性を踏まえた固有、共通の専門能力の修得度を評価している。 (エビデンス：『学生便覧』、『シラバス』等)	・「卒業制作」の成果は毎年9月から10月に開催される卒業公演期間、毎年2月に開催される「卒業制作展」で展示・公開している。 ・舞台芸術学科の就職先は、舞台芸術という特殊性から、ことに、俳優、ダンサー、演出といった職種は就職という形式が成立しづらい実情があるが、それでも各コースの特性を活かした関連企業への就職や、公演、映画、テレビ等への出演を果たすもの、公演スタッフの一員となるものも多い。 ・さらに協働作業をはじめとした当学科の共通テーマは、人間関係構築の困難がいわれる現在、社会人として生きるための貴重な支えとなっている。 新たな分野である「オートメーション」に関しては、関連授業を導入し、実演者として培った学修成果を別の形で活用できる可能性を学生に提示した。現在は試行段階であり、今後、教育内容の整理および体系化を進める予定である。		

3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価【2025】

	学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー)	教育課程編成方針 (カリキュラム・ポリシー)	入学者選抜方針 (アドミッション・ポリシー)	単位認定基準	進級基準	卒業 (修了) 認定基準	学修成果の測定方法	学修成果	学修成果を見教育内容・方法の充実・改善	進捗状況
芸術計画学科	芸術・文化を多角的に理解し、作り手、受け手と共に生きる力を増進する創造的な出会いの場を、最新のテクノロジーを視野に入れて構想・実現する総合的プロデュース力を身につけ、かつ卒業要件単位数124単位を修得し、卒業研究の審査に合格した者に学士(芸術)の学位を授与する。 総合的なプロデュース能力を活用し、社会に貢献する「総合イベントプロデューサー」「ロミューティイベントプロデューサー」「アートイベントプロデューサー」「キュレーター」などを目指せる人材を育成する。	芸術・文化の領域で、作り手、受け手とともに生きる力を増進する創造的な出会いの場を、最新のテクノロジーを視野に入れて構想・実現する総合的プロデュース能力の獲得を目指して、発想力の育成のための広範な知識を修得し、並行して発想を実現できる実践力を修練する。 3年次には「卒業計画」、4年次には「卒業研究」が課され、各自のテーマをもとに研究活動の結果を発表する。	芸術計画学科では、芸術・文化の過去、今、未来を多角的に理解し、作り手、受け手と共に生きる力を増進する創造的な出会いの場を、最新のテクノロジーを視野に入れて構想・実現する総合的プロデュース力を身につけたいと思う人物を求めている。 【求める学生像】 ・芸術・文化に興味を持ち芸術・文化が展開される場に関わる意欲のある人物 ・芸術や文化の力を使って、わくわくドキドキする場の構想・実現を目指す人物 ・芸術や文化の力を使って、積極的に社会や地域に貢献したい人物 ・芸術や文化の力を使って、くらしの在り方を創造的に作り変えることを目指す人物	・大学全体として基準を定め、『学生便覧』に記載している。 ・芸術計画学科の必修科目等については、定期的な学科会議等で認定基準を行い、単位認定基準について合意形成を図っている。 ・とりわけ、必修科目「社会連携プロジェクト演習Ⅰ」「プロジェクト演習Ⅱ」の種目及びプロジェクトは芸術計画学科における最大の学びの場として重視している。またプロジェクト間で成績評価基準に齟齬が生じないように配慮し、相対評価から絶対評価へ、そして担当教員の評価点を参考に学科長に於いて最終評価をする方法を採用している。 (エビデンス：『学生便覧』)	・各学年において適切な学修成果を得るため、進級のための基準を学年ごとに定め、『卒業計画』に記載している。 ・2018年度のカリキュラム改訂では、「必修科目」の所要単位数を増やすとともに、選択必修科目と所要単位数を見直し、それによってディプロマ・ポリシーの「総合的プロデュース力」の獲得を促している。 1年次～2年次：2年次の演習に向けての学修の基礎的知識及び教養が修得できているか。 2年次～3年次：演習等において、ディレクション及びプロデュースのスキルが修得できているか。 3年次～4年次：卒業論文及び論文のプレゼンテーションに対して必要な専門知識や実践スキルが修得できているか。 (エビデンス：『学生便覧』)	・芸術計画学科開講の専門科目については、「必修科目」「選択必修科目」ごとに卒業所要単位数を定め、『学生便覧』に記載している。 ・2018年度のカリキュラム改訂では、「必修科目」の所要単位数を増やすとともに、選択必修科目と所要単位数を見直し、それによってディプロマ・ポリシーの「総合的プロデュース力」の獲得を促している。 ・卒業論文・プレゼンテーションについては、各ゼミの担当教員が論文の採点を実施した上で、それらの論文を基にパワーポイントを使用した、プレゼンテーションを芸術計画学科の全専任教員に対して実施し卒業予定者による、グループ審査を行っている。そして学長賞、学科長賞、研究室賞を授与し、卒業証書授与式の日学科において表彰を行っている。 (エビデンス：『学生便覧』『卒業論文執筆の手引き』)	・就職状況の調査 ・学芸員、図書館司書等の資格取得状況 ・卒業生の活動状況の把握 ・授業アンケート ・進級者状況 ・卒業論文・プレゼンテーションについては、各ゼミの担当教員が論文の採点を実施した上で、それらの論文を基にパワーポイントを使用した、プレゼンテーションを芸術計画学科の全専任教員に対して実施し卒業予定者による、グループ審査を行っている。そして学長賞、学科長賞、研究室賞を授与し、卒業証書授与式の日学科において表彰を行っている。	・2・3年次の必修科目「社会連携プロジェクト演習Ⅰ」「プロジェクト演習Ⅱ」の9種目及びプロジェクトは、学内外問わず、作品展示や音楽フェス企画運営サポートなど多岐にわたる。その成果・報告は大阪芸術大学ウェブサイトに掲載しており、学外に向け発信している。 ・学生のニーズや社会の動向をふまえた新科目を積極的に取り入れる。 ・各学年における必修科目内容のアップデート。 ・複数学年がともに学び、討議をすることができるとともに、社会の中でのプロジェクトのあり方を体験学習する機会を設けて学修内容に対する学生の自覚を促すことができ、かつ対社会的にも響くネーミングの考察。 ・社会の多様性に伴い「卒業計画」および「卒業研究」の内容をブラッシュアップ。	AI (人工知能) が新しい時代の未来を拓く中、芸術計画学科は以下のような改善方針を掲げ、教育内容の充実や方法論の開発を図って行く。 ・学科がアップデートを図る上で不必要と思われる科目の廃止。 ・学生のニーズや社会の動向をふまえた新科目を積極的に取り入れる。 ・各学年における必修科目内容のアップデート。 ・複数学年がともに学び、討議をすることができるとともに、社会の中でのプロジェクトのあり方を体験学習する機会を設けて学修内容に対する学生の自覚を促すことができ、かつ対社会的にも響くネーミングの考察。 ・社会の多様性に伴い「卒業計画」および「卒業研究」の内容をブラッシュアップ。	・本年度は、2024年度に行ったカリキュラム改訂に伴い、1・2年次の新カリキュラムと3・4年次の旧カリキュラムが併存した状態にあるが、新旧カリキュラムともに「3つのポリシー」に変更はないので、履修者に不利益が生じないよう心掛けた。特に新カリキュラム「社会連携プロジェクト演習Ⅰ」と旧カリキュラム「プロジェクト演習Ⅱ」では授業時間数に違いがあるため、2年次生の履修と3年次生の履修を明確にするよう努めた。 ・上記「社会連携プロジェクト演習Ⅰ」「プロジェクト演習Ⅱ」は学科の根幹をなす必修科目であるため、学生の自主性を重んずるとともに、社会の中でのプロジェクトのあり方を体験学習する機会を設けて学修内容に対する学生の自覚を促すことができ、かつ対社会的にも響くネーミングの考察。 ・社会の多様性に伴い「卒業計画」および「卒業研究」の内容をブラッシュアップ。
キャラクター造形学科	漫画、アニメーション、ゲーム、フィギュアアーツ各分野のクリエイターとして活躍できる能力を身につけるとともに、社会人として必要なコミュニケーション、プランニング、プレゼンテーション、プロデュースの能力を身につけ、かつ卒業要件単位数124単位を修得し、卒業研究の審査に合格した者に学士(芸術)の学位を授与する。 【漫画家】「漫画原作者」「アニメ監督」「アニメーター」「アニメ脚本家」「ゲームクリエイター」「フィギュア原型師」「キャラクターデザイナー」「イラストレーター」などを目指せる人材を育成する。	漫画、アニメーション、ゲーム、フィギュアアーツの各分野において、魅力的なキャラクターを創造するために必要とされる物語や世界観を構築する方法論を身につけるとともに、アナログとデジタル両方の表現技術を修得し、自己のオリジナリティを各分野で発揮できる人材を育成する。 4年次には、卒業作品の制作に取り組み、卒業制作展において展示発表を行う。	キャラクター造形学科では、漫画、アニメーション、ゲーム、フィギュアアーツの各分野でドラマやキャラクター表現を通じて、多くの人々に感動を与える存在になりたい人物を求めている。 【求める学生像】 ・学生時代を「能力と可能性を高め表現力を鍛える時期」と捉え自己研鑽できる人物 ・自分の世界観を伝える技術、能力を高め、社会的視野を広げたい人物 ・キャラクター創造のための総合的な知識・技術を身につけたい人物 ・さまざまなメディアを使ったキャラクター・プロデュースに興味のある人物	大学全体として基準を定め『学生便覧』に記載している。必修科目については定期的な学科会議等で協議を行い、認定基準について合意形成を図っている。 初年次必修科目として「キャラクター造形基礎」「ストーリー演習」「キャラクター原論Ⅰ」を設け、2年次からどのコースに進んでも各分野で有効な表現手段となる基礎技術と考え方を身につける学びを提供している。 また各コースごとに卒業必修科目として、「構成の基礎」「造形芸術演習」「ゲーム概論」「フィギュア制作論」「マンガ創作の表現Ⅰ」「アニメーション技術演習」「漫画研究」「アニメ総論」「ゲーム技術演習」を設け、各分野ごとの技術、表現力をしっかりと身につけるように配慮して時間割配分をしている。	各学年において適切な学修成果を得るため、学年ごとの進級基準を定めて『学生便覧』に記載している。 学年ごとに各学年の必修科目をクリアできるように指導している。 各学年ごとにその学年で提供される学びに見合った成果を完成させるべく、コースごとに課題を与えたり、成果物を提出させることで学生自身が自身の表現力の広がりを実感できるように指導している。 1年次は自らの伸びしろに気づき表現の幅を広げる。 2年次は自らが実感できる技術と世界観の広がりを身につける。 3年次は開題の第三者へのアピールに繋がる表現方法を身につける。 4年次は社会で通用する確かな技術と、一般社会を魅了する個性の輝きを具体的に表現する。 以上が学修成果として修得できているかを進級基準とする。	キャラクター造形学科の専門科目については各コースごとに卒業所要単位数を定め『学生便覧』に記載している。 成果物の良し悪しを数字で測定できない分野なので、客観的に測れるものは難いが、各ゼミごとに卒業制作をテーマに、学科全体として優秀作品を評価している。 漫画一次作品にストーリーの面白さに加え、描画力が十分に備えられていること、いさよとした表情、動きを充分に描き込めることが求められる。ストーリーの構成力と画面の構成力、また、近年では描画にはデジタルスキルが重要となっているため、デジタルスキル会でも含めた総合評価とする。 アニメーションコースのクリエイターとして活躍できる能力を、制作作品から評価する。作品制作においては、学年を重ねるごとに創作における総合力が上がっているかを評価する。卒業制作展等の上映会におけるアンケート等の観客の意見を評価の参考とする。 ゲームコースはビデオゲーム内に登場するキャラクターの魅力や研究・考察、3D/2Dグラフィックや論議や文章で表現し、商業的に魅力的な評価をする。考察した世界観やキャラクター設定を基にキャラクターがビデオゲーム内で魅力的に表現できているかを評価する。 フィギュアアーツコースはフィギュアの原型制作に必要な技術、フィギュアのデザインや商品開発のアイデアの面白さ、制作したフィギュアの造形的な完成度等で評価する。	各分野 (マンガ、アニメーション、ゲーム、フィギュアアーツ) ごとに、クリエイターとして活躍するために必要な表現方法に結びつく技術と企画力を身につけているか、を確認すべく、成果物を評価している。 表現に必要な不可欠なデジタルスキルを学修させた総合評価としている。また、常に「公開すること (展示を含む)」を意識しているかも確認している。 ・学科内だけでの判断が全てではなく年間通じて機会を見つけては各分野の社会への窓口となる人々に学生の作品を紹介している。 ・漫画分野であれば、年に何度も大手出版社の編集者を招き、有望な学生の作品を魅了してもらうことでデビューに繋げようとしている。 ・毎年在校生、卒業生を含め何名もがメジャーデビューしている実績は、全国でも飛び抜けている。	1年次から3年次までの授業は全て運動しており、年次ごとのステップアップが望める形となっている。 4年次の卒業制作はその集大成と位置づけられている。卒業制作は学科内全コースの教員により多角的な視野での作品評価が行われ、成果物の質の向上が達成されている。 また各分野ごとの専門企業などとの交流や、専門家からのアドバイスを受けられる場を積極的に設定しており、卒業後の道へのスムーズな送り出しに結びついている。	学修成果を点数のみで評価できる分野ではないので期待通りの成果があがったかどうかを客観的に判断するのは難しい面がある。 しかし、学生本人が「イメージを形にする具体的な方法がつかめない」「自分の作品に自信が持てない」などと悩んでいる場合は、個別指導により自分の可能性に気づく方向を一緒に探るといったスタンスで接している。 教員としては「作品が社会でどう受け止められるか」を学生に示す立場であるという点を肝に命じて接するよう努めている。作品をより多角的に捉える視点を示すことは、教育内容の充実にも繋がる。	2年次の実習展示(Q展)の担当教員を新たに増やし、学生作品の発表の魅せ方を以前より細かく指導した。 Q展で実際に制作された各コース2年生の作品を見て、1年生はどのコースへ進むかという参考にもなり、2年生には作品を創る所から入に見られて発表するという意識を芽生えさせる。 次年度からのカリキュラム変更にて、「アニメCG基礎」を新たに開講する。1年次からコースを問わず現代のキャラクター業界の就職に役立つMayaやBlenderのソフトを使用している。また入学時に楽典などCG基礎演習をアニメーションコース・ゲームコースから自らコースの卒業必修から外し、型にとらわれず自由に学べるようにし、名称を現在OCGや3D業界に合わせて「3DCG基礎演習」と名称変更を行う。 また、学生のステップアップの為、「キャラクター造形基礎」「漫画制作実習Ⅰ」「漫画制作実習Ⅱ」ではクラス数を増やし、学生に基本から応用まで幅広く教える。
音楽学科	音楽の基礎的能力をそなえ、社会の動きやニーズを的確に把握し、音楽を新しく捉え直す能力。また音楽の指導者として教育現場で求められる適切な能力を身につけ、かつ卒業要件単位数124単位を修得し、卒業論文の審査に合格した者に学士(芸術)の学位を授与する。 【作曲家】、「サウンドプログラマー」、「音響エンジニア」、「音楽科教員」などを目指せる人材を育成する。	音楽・音響デザインコースでは、作曲や音楽作品の研究は元より、電子音楽、音響システムデザイン、サウンド・レコーディング、SR、楽器などや研究し、音楽と音響を駆使して社会に貢献できる人材を育成する。 音楽教育コースでは、創造性をそなえ時代のニーズに即応する教育者を育てることを目標とする。 4年次には、卒業作品の制作、または卒業論文の執筆に取り組み、卒業制作展において発表する。	音楽学科では、いつの時代も人間社会に関心をもちたってきた音楽の素晴らしさや多様性を学び、新しい音楽の創造者、音楽教育の指導者になりたい人物を求めている。 【求める学生像】 ・音楽を通して美を追究する創造力のある人物 ・音響技術を駆使して音楽をより豊かにしたい人物 ・既成概念にとらわれず音や音楽と向き合いたい人物 ・音楽教育の指導者として将来活躍したい人物	・大学全体として単位認定基準を定め、『学生便覧』に記載している。 ・音楽学科のすべての科目について、定期的な学科会議等で協議を行い、作品や論文の独創性と完成度などのような尺度で評価するかたの単位認定基準について合意形成を図っている。 ・とりわけ、初年次教育の要となる必須演習科目である「音楽通論」等の音楽共通基礎科目、卒業年度の必須演習科目「卒業制作」(音楽・音響デザインコース)は少人数クラス複数回講義等の専門的知識あるいは技術が充分に修得できていることから、「音楽教育演習2」(音楽教育コース)の成果である卒業論文を含めて共通の試験を行うなど、クラス間で成績評価基準に格差や不公平が生じないように配慮している。 (エビデンス：『学生便覧』、学科会議議事録等)	・各学年において適切な学修成果を得るため、進級のための基準を学年ごとに定め、『卒業計画』に記載している。 ・2022年度に音楽・音響デザインコースのカリキュラムを一部改訂し、学位授与方針の中の「社会の動きやニーズを的確に把握」することさらに沿ったかたで卒業を認定できるようになっている。 ・「卒業制作」、「卒業論文」については、3年次での「課題研究演習Ⅰ」(音楽・音響デザインコース)、「卒業教育演習Ⅰ」(音楽教育コース)で研究のテーマや方向性に関する指導をし、4年次では各授業、および、音楽・音響デザインコースについては卒業制作提出ガイダンスで、分量・形式等について学生に周知し、その上において卒業を認定している。 (エビデンス：『学生便覧』、卒業制作提出ガイダンスでの配布物、「音楽教育演習2」での配布物等) (エビデンス：『学生便覧』等)	・卒業制作、卒業論文、および、音楽教育、音楽教育コースの卒業論文について、毎年2月に開催される「卒業制作展」で展示・公開し、また、ピアノ・声楽・管弦打楽隊の成績優秀者は、卒業発表会に出演している。 ・一定数の学生は音楽学科での学修成果を土台として音楽関係の企業に就職している他、個人として音楽活動をjしている卒業生もいる。 ・音楽・音響デザインコースでは毎年数名程度、音楽教育コースではほぼ全員が教員免許状を取得し、音楽教育コースの卒業生の多くは、教員採用試験に合格して教諭になるか、講師として学校に勤務している。2019～2021年度は各1名が4年次生のうちに教員採用試験に合格している。	・音楽・音響デザインコースの卒業制作、音楽教育コースの卒業論文については、担当教員全員で口述試験を行い、学長および各専任を予定している。その際の議論を通じて、卒業生において学生が身に付けるべき卒業成果について学科の教員間で合意形成が図られている。卒業制作、卒業論文はすべて、毎年2月に開催される「卒業制作展」で展示・公開し、また、ピアノ・声楽・管弦打楽隊の成績優秀者は、卒業発表会に出演している。 ・一定数の学生は音楽学科での学修成果を土台として音楽関係の企業に就職している他、個人として音楽活動をjしている卒業生もいる。 ・音楽・音響デザインコースでは毎年数名程度、音楽教育コースではほぼ全員が教員免許状を取得し、音楽教育コースの卒業生の多くは、教員採用試験に合格して教諭になるか、講師として学校に勤務している。2019～2021年度は各1名が4年次生のうちに教員採用試験に合格している。	・音楽・音響デザインコースにおいては、学修成果を確認しながら他学科とのコラボレーションや企画交流を増やし、音楽学科だけで完結しない多様性のある芸術創作の機会を増やす。 ・音楽教育コースにおいては、小中高等学校における音楽の授業だけを考えるのではなく、本学の特性を生かして、諸教科、とりわけ他の芸術教科と関係の中に音楽教科を位置づけ、さらには、それを越えて、諸芸術の一つという捉え方で音楽を教育できる人材の育成を目指す。	・音楽・音響デザインコースにおいては合和7年年度、音響エンジニアとして国家資格舞台機構調整技術士級の合格率9.6%と成果を上げている。(2.6名の受験者数うち2.5名の合格)。また2級合格者などは在学中から自ら音響会社を立ち上げるなどアントレプレナー精神も着実に育っている。また入学時に楽典などCG基礎演習をアニメーションコース・ゲームコースから自らコースの卒業必修から外し、型にとらわれず自由に学べるようにし、名称を現在OCGや3D業界に合わせて「3DCG基礎演習」と名称変更を行う。 ・音楽教育コースにおいては、4年次生のうちの2名が教員採用試験に合格している。しかし、全体のレベルが上がっているかという点、必ずしもそうは言えない面もあって、卒業後は児童生徒を教える立場になるのだからいう自覚を持って大学での学修に励むような方向づけが必要であると考えている。	



3つのポリシーを踏まえた学修成果の点検・評価【2025】

	学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー)	教育課程編成方針 (カリキュラム・ポリシー)	入学選抜方針 (アドミッション・ポリシー)	単位認定基準	進級基準	卒業 (修了) 認定基準	学修成果の測定方法	学修成果	学修成果を見て教育内容・方法の充実・改善	進捗状況
大学院	芸術理論研究及び芸術創造について高度な専門性が備わり、研究者及び芸術家として自立し得る能力を学修することを求める。所定必要単位数を修得した上で、研究指導教授による研究指導を得て、学位 (修士・博士) 論文、学位 (修士) 作品を提出し、かつ審査及び最終試験に合格した者に学位を授与する。	建学の精神をふまえ、博士課程前期課程に「芸術化学専攻」及び「芸術制作専攻」として博士課程後期課程に「芸術専攻」を設置し、相互の啓発的な緊張関係の維持と連携を推進する。 教育課程の編成においては、各々の専門研究領域を軸としつつ領域間あるいは専攻間の横断的な科目履修を奨励し、高度な芸術創造及び発見的創作活動が可能となるよう配慮する。	芸術理論研究及び芸術創造の継承に必要な専門知識・思考力及び技術を修得しているかどうかを評価基準とし、研究計画・科目 (博士課程前期課程) または「研究」科目 (博士課程後期課程) を軸に、所定の単位を修得する。博士課程前期課程では両専攻共通の科目を設定、異なる研究領域の科目についても履修可能としている。博士課程後期課程では「研究」科目 (博士課程前期課程) または「研究」科目 (博士課程後期課程) を履修し、研究指導教授の指導を受けた上で提出する。 (エビデンス: 『学生便覧』、大学院ウェブサイト)	大学院全体として単位認定基準を定め、『学生便覧』他に記載している。学生はそれぞれの研究領域の「研究演習」科目 (博士課程前期課程) または「研究」科目 (博士課程後期課程) を履修し、研究指導教授の指導を受けた上で提出する。各年度の「研究計画書」及び「研究概要報告書」を、研究指導教授の指導を受けて提出する。 (エビデンス: 『学生便覧』、大学院ウェブサイト)	各専攻 (博士課程前期課程) 及び各研究分野 (博士課程後期課程) について必要な修了所要単位数を定め、『学生便覧』他に記載している。加えて各専攻及び各研究分野における学位論文作品の評価基準、学位論文 (作品) 提出要件を定め、『学生便覧』他に記載している。 修了年度には各学位 (博士・修士) 論文・作品題目を提出する。 博士課程後期課程では芸術文化研究分野の学位 (修士) 論文研究発表会で中間発表を行い、芸術制作研究分野の学生は (博士) 論文予備審査を受け合格しなければならない。 (エビデンス: 『学生便覧』、大学院ウェブサイト)	各専攻及び各研究分野について、学位論文、学位作品の審査委員会による審査及び最終試験を、公開による口頭試問により行う。その結果と所定必要単位の修得状況について、学位 (修士) 論文、作品については各専攻の合同審査会、学位 (博士) 論文については芸術文化研究分野の合同審査会、芸術制作研究分野の分野別審査会・合同審査会による審査を経て、最終的に大学院委員会及び芸術研究科委員会において学位 (修士) 授与の可否を審議・決定する。 以下に項目について毎年調査してデータを蓄積し、それに基づいて教育内容・方法の充実・改善を検討する。 ・学位の授与者数 ・専修免許等資格取得状況 ・在学生・修了生による学修成果の発表・公開、社会的活動等の状況	学位 (修士・博士) 論文を大阪芸術大学図書館に保存し、大学の教育、研究並びに広報を目的とする閲覧、複写を可能とする。博士学位論文と審査結果の詳細は修士及び大学院ウェブサイトでの公開、一部も同ウェブサイトで公開している。学位 (修士・博士) 論文の一部を大学院紀要『藝術文化研究』に発表することができる。学位 (修士・博士) 作品については、学内外で修了作品展 (造形系) 及び修了作品発表会 (動感系・音楽系) を開催するとともに、『芸術制作修士・博士作品集』を発行している。 前期課程・後期課程それぞれの状況を把握し、学修成果の測定のため、以下の項目について毎年調査してデータを蓄積し、それに基づいて教育内容・方法の充実・改善をはかっている。	「大学院ウェブサイト」をより充実したものに、必要且つ正確な情報を発信していく。2018年度より留学生の出願資格審査に日本留学試験 (EJU) を導入して以来留学生の日本語能力が改善されたが、入学後にその能力をさらに向上させていく対策を講じる。 ・各学生自身の研究/作品に関わる言語表現能力を向上させる工夫をしている。 ・前期課程では学部からの内部進学者、後期課程では前期課程からの内部進学者を継続的に受け入れ、指導の一貫性及び学生間の連携を図っていく。 ・同時に他大学/社会人入学者に広く門戸を開いて、学生間の学修意欲を高めていく。	「大学院ウェブサイト」に関して若干の更新を行い、より正確な情報を掲載した。今後さらに本格的な見直しを行う予定である。 ・留学生在が研究を進めるうえで必要な日本語能力を充実させるため、専門の教員を配置し、必要に応じて授業内で日本語能力向上のための指導を行っている。 ・大学院の運営を円滑かつ安定的に行うためのワーキンググループを発足させ、カリキュラムや入試等に関する検討を随時行う体制を整備した。 (カリキュラム改訂) セメスター制の徹底、学びの構造の明確化、写真領域の分離・独立、講義科目の整理・統合、「制作理論演習」の拡充等を柱とするカリキュラム改訂を行い、2026年度入学生より実施する。 (2025. 12. 21)	
博士課程前期課程	(芸術化学専攻) 芸術理論の専門的知識の上、各研究領域の芸術文化に関わる個々のテーマについて専門的研究を深めた成果として学位 (修士) 論文を提出し、かつ審査及び最終試験に合格した者に学位 (芸術) の学位を授与する。 (芸術制作専攻) 各研究領域に関する専門的技術及び個々の独創的表現を作品として実現しうる能力を修得した成果として学位 (修士) 作品を提出し、かつ審査及び最終試験に合格した者に学位 (芸術) の学位を授与する。	(芸術化学専攻) 各研究領域の研究演習を軸に、異なる研究領域の科目についても履修可能な編成となっている。2年次には修士論文の作成に取り組む。 (芸術制作専攻) 各研究領域の研究演習を軸に、両専攻に共通の科目を設定し、異なる研究領域の科目についても履修可能な編成となっている。2年次には修了作品の制作に取り組み、発表を行う。	芸術研究科は博士課程前期課程に次のような学生を求める。 (芸術化学専攻) 芸術及び文化の諸分野に深い関心を持ち、芸術理論研究に必要な専門知識及び論理的思考力を備えており、自らの学術的研究を社会との関わりにおいて展開していく意欲をもっている人物。 (芸術制作専攻) 各目的の専門領域における芸術創造に必要な専門知識と技術を備えており、その知識と技術を生かして現代社会において独自の芸術創造の方向を深めていく意欲と能力をもっている人物。	大学院全体として単位認定基準を定め、『学生便覧』他に記載している。学生はそれぞれの研究領域の「研究演習」科目を軸に、所定の単位を修得する。両専攻共通の科目を設定、異なる研究領域の科目についても履修可能としている。 (芸術化学専攻) 一つの「研究演習」科目を選択して2年間継続履修し (8単位)、同じ研究領域の「基礎演習」 (2単位) を修得する。他に修得すべき科目28単位のうち「作品研究」と「原典研究」各1科目及び「特論」2科目 (計16単位) を必須とし、合計38単位以上を修得しなければならない。 (芸術制作専攻) 一つの「研究演習」科目を選択して2年間継続履修し (16単位)、同じ研究領域の「特殊研究」科目2科目 (8単位) と「制作理論演習」1科目 (2単位) を必須とし、他に修得すべき科目から3科目12単位を含み、合計38単位以上を修得しなければならない。 (エビデンス: 『学生便覧』、大学院ウェブサイト)	連続基準は特になが、修了年度までに学生は各自一つの「研究演習」科目を選択し、2年間継続履修しなければならない。各年度における授業科目の履修は、研究指導教授の指導を受けた上で履修科目を決定する。各年度の「研究計画書」及び「研究概要報告書」を、研究指導教授の指導を受けて提出する。 (エビデンス: 『学生便覧』、大学院ウェブサイト)	各専攻について必要な修了所要単位数を定めるとともに、各専攻における学位論文 (作品) の評価基準、学位論文 (作品) 提出要件を定め、『学生便覧』他に記載している。 (芸術化学専攻) 本専攻に2年以上在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、学位 (修士) 論文の審査及び最終試験に合格した者に「修士 (芸術化学)」の学位が授与される。学位 (修士) 論文提出要件として、学位 (修士) 論文題目の提出と、1ヵ国語の外国語学力に認定が必須となる。また研究領域ごとに開催される研究発表会で発表を行わなければならない。 (芸術制作専攻) 本専攻に2年以上在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、学位 (修士) 作品の審査及び最終試験に合格した者に「修士 (芸術)」の学位が授与される。学位 (修士) 作品は「修士 (修士) 作品題目」を提出する。各研究領域で定めた学位 (修士) 作品提出内容にしたいが、展示・発表をもって提出する。保存資料は所定の期日までに研究経路により提出する。 (エビデンス: 『学生便覧』、大学院ウェブサイト)	各専攻について、学位 (修士) 論文、学位 (修士) 作品の審査委員会による審査及び最終試験を、公開による口頭試問により行う。その結果と所定必要単位の修得状況に係る各専攻の合同審査会及び芸術研究科委員会において学位 (修士) 授与の可否を審議・決定する。 ・学位の授与者数 ・専修免許等資格取得状況 ・在学生・修了生による学修成果の発表・公開、社会的活動等の状況	(芸術化学専攻) 学位 (修士) 論文を大阪芸術大学図書館に保存し、大学の教育、研究並びに広報を目的とする閲覧、複写を可能とする。修士学位論文の要旨は大学院ウェブサイトにて公開している。また、学修成果の社会的な発信を促進するため、前期課程修了後に、学修成果の一部を、大学院紀要『藝術文化研究』に投稿できる体制を整えている。 (芸術制作専攻) 学位 (修士) 作品の審査及び最終試験の際に、その展示・発表は公開となっている。学位 (修士) 作品については、学内外において修了作品展 (造形系) 及び修了作品発表会 (動感系・音楽系) を開催している。また各年度の『芸術研究科修士・博士作品集』を発行している。また、学修成果の社会的な発信を促進するため、前期課程修了後に、学修成果の一部を、大学院紀要『藝術文化研究』に投稿できる体制を整えている。	学部からの内部進学者をさらに積極的に受け入れ、指導の一貫性及び学生間の連携を図っていくとともに、他大学/社会人入学者にも広く門戸を開いて、学生間の学修意欲を高めていく。学生による学修成果の社会への発信をさらに支援するとともに、研究科としても学生のキャリアパスを調査・開発し、高度な専門性を備えた自立した人材の育成に努める。各種資格の取得を促進する。 (芸術化学専攻) ・各教育機関や研究所・企業等で指導者・専門家として活動していくために、関連学会や研究会等での研究発表をさらに促進・支援していく。 (芸術制作専攻) ・各教育機関や企業等で指導者・専門家として活動していくために、必要となる言語表現能力をさらに向上させるよう努めるとともに、国内外の公募展やコンペ、コンクール等での成果発表をさらに促進・支援していく。	入学者数とその内訳は以下の通り (括弧内が内部進学者) 2022年度 芸術化学5人 (4人) / 芸術制作専攻31人 (22人) 2023年度 芸術化学4人 (3人) / 芸術制作専攻32人 (17人) 2024年度 芸術化学4人 (2人) / 芸術制作専攻37人 (17人) (カリキュラム改訂) セメスター制の徹底、学びの構造の明確化、写真領域の分離・独立、講義科目の整理・統合、「制作理論演習」の拡充等を柱とするカリキュラム改訂を行い、2026年度入学生より実施する。 またこれに関連して、学部教員との連携を強化し、学部からの内部進学者の拡大をはかっている。 2025年度の修了制作展は、スカイキャンパスの閉館に伴い、天王寺キャンパスでの開催に変更し、対外的な発信力をさらに強化するための準備を進めている。 (2025. 12. 21)
博士課程後期課程	(芸術専攻) 各研究分野 (芸術化学・芸術制作) における高度な理論構築力・制作技術にもとづき、個々の研究活動・創造活動を広く社会に発信するとともに、新たな芸術文化を牽引する指導者となりうる能力を養成する。その成果として博士論文 (研究作品、研究上演、研究演奏を含む) を提出し、かつ審査及び最終試験に合格した者に博士 (芸術化学) もしくは博士 (芸術) の学位を授与する。	(芸術専攻) 各研究分野 (芸術化学・芸術制作) における研究領域それぞれの研究科目を軸に、領域横断的な広範な専門性を追究する。3年次に博士論文 (研究作品、研究上演、研究演奏を含む) を完成させる。	芸術研究科は博士課程後期課程に次のような学生を求める。 (芸術専攻) 各研究分野 (芸術化学・芸術制作) における芸術理論研究及び芸術制作の深化に必要な専門知識・思考力及び技術を備えており、各自の専門領域において既存の価値観にとらわれず、先進的な芸術を創造・構築していく情熱と遂行力をもっている人物。また各領域における指導的な立場を目指す人物。	(芸術専攻) 大学院全体として単位認定基準を定め、『学生便覧』他に記載している。学生は各自一つの「研究」科目を選択し、3年間継続履修しなければならない。各年度における授業科目の履修は、研究指導教授の指導を受けた上で履修科目を決定する。各年度の「研究計画書」及び「研究報告書」を、研究指導教授の指導を受けて提出する。 (エビデンス: 『学生便覧』、大学院ウェブサイト)	(芸術専攻) 連続基準は特になが、修了年度までに学生は各自一つの「研究」科目を選択し、3年間継続履修しなければならない。各年度における授業科目の履修は、研究指導教授の指導を受けた上で履修科目を決定する。各年度の「研究計画書」及び「研究報告書」を、研究指導教授の指導を受けて提出する。 (エビデンス: 『学生便覧』、大学院ウェブサイト)	(芸術専攻) 本専攻に3年以上在学し、所定の単位を修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、学位 (修士) 論文の審査及び最終試験に合格した者に「博士 (芸術化学)」または「博士 (芸術)」の学位が授与される。各研究分野について必要な修了所要単位数を定めるとともに、各研究分野における学位論文作品の評価基準、学位提出要件を定め、『学生便覧』他に記載している。 修了年度には、学位 (博士) 論文題目を提出する。 (芸術化学研究分野) 学位 (博士) 論文の提出要件は以下の通り。①研究領域ごとに開催される研究発表会で発表を行わなければならない。②学位 (博士) 論文題目を提出しなければならない。③2ヵ国語の外国語学力の認定を受けなければならない。④ウェビナー (電話) つき学会誌等に論文を一本以上掲載しなければならない。 (芸術制作研究分野) 学位 (博士) 論文の提出要件として、学位 (博士) 論文「論文」と「作品」の予備審査を受け合格しなければならない。合格した者は学位 (博士) 論文題目の提出を必要とする。審査方法は、公開による作品審査及び口頭試問とする。 (エビデンス: 『学生便覧』、大学院ウェブサイト)	(芸術専攻) 各研究分野について、学位 (博士) 論文 (及び作品) の審査委員会による審査及び最終試験を、公開による口頭試問により行う。その結果と所定必要単位の修得状況について、学位 (博士) 論文とその審査結果の詳細は修士及び大学院ウェブサイトにて公開している。 ・芸術文化研究分野 学修成果の社会的な発信を促進するため、後期課程在学中および修了後に、学修成果の一部を、大学院紀要『藝術文化研究』に投稿できる体制を整えている。また、関連学会等での口頭発表や学会誌への投稿も積極的に促進・支援している。 学位 (博士) 授与者数: 2022年度1人、2023年度0人、2024年度2人 専修免許等資格取得状況: 2023年度0人、2024年度1人 在学生・修了生による学修成果の発表・公開、社会的活動等の状況について別表にまとめる。	(芸術専攻) 前期課程からの内部進学者をさらに積極的に受け入れ、指導の一貫性及び学生間の連携を図っていくとともに、他大学/社会人入学者にも広く門戸を開いて、学生間の学修意欲を高めていく。学生による学修成果の社会への発信をさらに支援するとともに、研究科としても学生のキャリアパスを調査・開発し、きわめて高度な専門性を備えた自立した人材の育成に努める。各種資格の取得を促進する。 ・芸術文化研究分野 教育機関や研究所・企業等で指導者・専門家として活動していくために、学位誌をもとにした審査の出版等、学修成果の公開をさらに促進・支援していく。 ・芸術制作研究分野 各教育機関や研究所・企業等で指導者・専門家として活動していくために、国内外の公募展やコンペ、コンクール等での成果発表をさらに促進・支援していく。	入学者数とその内訳は以下の通り (括弧内が内部進学者) 2022年度 芸術化学0人 (0人) / 芸術制作専攻3人 (3人) 2023年度 芸術化学0人 (0人) / 芸術制作専攻4人 (4人) 2024年度 芸術化学2人 (2人) / 芸術制作専攻6人 (4人) (カリキュラム改訂) セメスター制の徹底、学びの構造の明確化、写真領域の分離・独立、講義科目の整理・統合、「制作理論演習」の拡充等を柱とするカリキュラム改訂を行い、2026年度入学生より実施する。 またこれに関連して、学部教員との連携を強化し、学部からの内部進学者の拡大をはかっている。 2025年度の修了制作展は、スカイキャンパスの閉館に伴い、天王寺キャンパスでの開催に変更し、対外的な発信力をさらに強化するための準備を進めている。 (2025. 12. 21)	